

# 西南学院史資料センター開設と 西南学院百年館（松緑館）竣工までの歩み

前田 誠史

## はじめに

1994年11月8日、当時、理事の一人であった村上寅次氏より伊藤理事長および田中院長・学長宛に『西南学院歴史資料館設置の必要性について（意見具申）』と題した文書が提出された。そこには、資料館の機能並びに「博物館法上の相当施設」との関連や西南学院アジア地域研究所（仮称）設置の展望について、同氏の構想が記述されており、20数年前より、今般設置に至った西南学院史資料センター（以下、「資料センター」という。）の必要性について言及されている点は非常に興味深い。

今回紙面を借りて、この資料センターの設置構想から開設に至るまでの経緯について、2016年3月18日に竣工し、同センターや同窓会関連機能を有する西南学院百年館（松緑館）の全体構想を交えながらご紹介したい。

## 1. 資料センター設置構想

前述の意見具申が提出されてから時が経つこと約13年。2007年7月18日付の西南学院百年史編纂準備委員会（以下、「準備委員会」という。）にて、「西南学院を作り上げた100年に及ぶ学院史は、優れて教育史の研究及び展示対象である。学院は、将来の教育の更なる充実発展のために自らの学院史を本格的かつ継続的に研究し、その成果を広く世に問うセンター設立を構想する時期を迎えている」旨を記した『西南学院史資料センター（仮称）設立（構想案）』が協議されている。この構想案には、資料センター（仮称）の設置目的として、①保育所から大学院までの建学の精神に基づく統合のシンボルの施設としての機能、②建学の精神に基づく西南学院の教育の未来のために、これまでの教育の軌跡を探求し、そのために資料の収集と研究を行い、その成果を展示すること、③学院史資料の公開・展示や年史編纂の企画・発行、が列記されている。さらに、その後続く目的には、④パプテスト資料センターを付設し、西南学院の源流であるパプテストの資料の収集・研究を積極的に推進し、日本における

バプテスト研究の中核センターを目指す、と記されており、資料センター設置にかけ準備委員会の想いが集約されている。

その後、2007年11月15日に準備委員会の小林委員長より寺園院長宛に『西南学院大学付設「西南学院創立百周年記念館」（仮称）設立について（要望）』が提示された。そこには、学院創立100周年記念事業の一環として、西南学院の歴史資料館としての機能を有する西南学院創立百周年記念館（仮称）の設立要請を中心に、同記念館を前述の建学の精神に基づく統合のシンボリック的殿堂施設とすることや資料収集・展示、年史等の刊行、バプテスト資料センター付設を目的とすることなどが掲げられ、ホーム・カミングデー時の寄り所や、自校史料目等の実地見学の場所として活用することなどが謳われている。さらには、コンセプトの一つに「大学博物館は、パレスチナの地で始まり、世界宗教となったキリスト教の蒔かれた種としての西南学院の前史を振り返る壮大なコンセプトの博物館である。西南学院創立百周年記念館（仮称）は、その蒔かれた種が、建学の精神として福岡の地の西南学院でどのように成長したかを知る施設として、大学博物館との連携を図る」と明記されており、資料センターが開設した今日において、貴重な示唆が与えられている。

さらに、2008年12月22日に同じく準備委員会委員長より院長宛に『「西南学院史資料センター」の設置について（提言）』が提出された。同提言では、2009年度より自校史教育の一環として「西南学院史講義」が臨時開講される予定であることに触れつつ、資料センターが単に資料の保管・整理に終始するのではなく、恒常的に調査・研究を含めたアーカイブ活動を担うことが要望されている。さらには、大学設置のセンター方式にすることにより、私立大学等経常費補助金の対象となる可能性のみならず、学院史対象の研究論文や講演会も大学の事業として文部科学省の補助金対象となりうることを他大学の事例を交えながら提言している。同提言を踏まえ、資料センターの位置づけを学院あるいは大学とするかの是非、並びに予算措置に関し、その後数回に亘り、常任理事会にて協議されているが、その段階では結論に至っていない。

その後も準備委員会では精力的に協議が行われ、2009年11月26日には、同じく準備委員会委員長より『学院史関係の懸案事項について』という文書が院長に提出された。同文書においては、学院創立100年後は、他大学と同様に恒常的に学院史業務を行う部署が必要であること、並びに2007年11月9日付で創立100周年事業計画委員会に提案された西南学院創立百周年記念館（仮称）への資料センターの設置及び学院史関係の展示スペースの確保について要請がなされている。

## 2. 西南学院百年館建設構想の進展と資料センター設置構想のゆくえ

2011年9月30日付の常任理事会にて資料センターは大学キャンパス・グランドデザインの中にも入れることが承認され、2012年5月24日付の同じく常任理事会にて100周年記念学院資料センター（仮称）は2016年に竣工予定である新図書館内の一画に確保することが最も適当である旨、協議がなされている。しかしこの段階では継続協議となり、結論に至るまでには、今しばらく時を待つことになる。

その後、2012年8月30、31日付の常任理事会にて100周年記念館（仮称）建設の方向性が了承され、資料センターは同建設に係る検討の中で議論されることとなった。同年9月20日付の常任理事会において、同記念館は、①設置場所を東キャンパス内とする、②機能として学院史資料センター（仮称）、同窓会関連施設及び同窓生交流空間を含むこと、が了承された。同年10月25日には、事務局長を委員長とする建設に係る検討ワーキングチームの設置が了承され、担当部署は100周年事業推進室と定められた。その後、ワーキングチームによる検討を経て答申案が纏められ、2013年3月1日に理事長へ答申された。答申には、建物の竣工時期を2016年春の予定とすること、建設地を東キャンパス内の法科大学院棟北側、新本館東側の敷地とすること、学院史資料センター、並びに同窓会関連施設および同窓生交流空間を設置すること、正式名称については、後に一般公募等により理事会にて決定すること、その他、構造や外観、建築費などに関する事項が盛り込まれている。さらには、同記念館内に設置が想定される付加的な機能数点が含まれていたのだが、これらは実現に至っていない。

2013年4月4日付の常任理事会にてワーキングチームによる答申を踏まえた『100周年記念館（仮称）建設方針』が承認され、同建設方針に示された記念館の建設地、機能、規模等に沿って詳細を検討するために、事務局長を委員長とする100周年記念館（仮称）建設委員会が発足した。建設委員会では、当初2013年8月末までに常任理事会へ答申を行う予定であったが、先に触れた付加的な機能に係る関係各所との協議・交渉および調整に時間を要し、予定が遅れて同年12月16日に答申、翌年1月16日に常任理事会にて同答申を踏まえた建設概要が承認された。

その後は、同建設概要に示された基本コンセプト①学院史資料センター（仮称）の設置、②同窓生、保護者とのネットワーク強化、並びに施設・設備に関する概要、などを前提に基本設計が進められた。2014年10月9日、2015年2月27日にそれぞれ基本設計および実施設計が承認され、2015年5月26日に起工式を経て、着工し、約10か月間の工期を経て、2016年3月18日に無事竣工を迎えた。竣工後は、皆さまの記憶にも新しいが4月7日に献堂式、約6か月間、資料センターの展示工事を施した後、同年

10月22日にオープニングセレモニーを執り行い、西南学院百年館および資料センターは晴れて開設を迎えた。

なお、西南学院百年館（松緑館）という館名の由来であるが、先の答申に沿って、2015年7月の1か月間、本学学生・生徒・児童・園児、同窓生、教職員を対象に名称公募を実施した。応募の中から、100周年の後も同周年を記念して建設された建物であることを皆が憶え、また、学院を想起させるような名称であることを前提に、選考委員会などによる選定を行った結果、学院校歌にも歌われ、学院を象徴するものである松や緑を重ねた名称が採用された。



2016年3月18日に竣工した百年館（松緑館）

### 3. 資料センター設置構想の具体化から開設に至るまで

百年館の建設の検討と並行して、資料センターの設置に向けて同センターの役割・機能や位置づけ、組織形態などに関する構想策定を担う検討委員会が2014年2月より協議を開始した。武井前副学長を委員長とする同委員会は、数回に亘る協議を経て、資料センター（仮称）設置構想を同年5月16日に答申、5月22日付の常任理事会にて協議了承に至った。答申においては、正式名称を「西南学院史資料センター」とし、2016年4月1日に設置することといった事項に加え、「創立者であるC.K.ドージャー及び学院の創立、運営等に携わった関係者の事績を明らかにするとともに、西南学院創立前後の時代から今日に至るまでの学院に関する歴史を調査・研究し、建学の精神

を将来に伝承する」といった設置目的を示し、その目的を実現するために、①資料の収集、整理、保管、②資料の調査・研究、③資料の展示、公開、④教育、⑤資料閲覧、⑥編纂・刊行、広報という大きく6つの役割・機能を期待することが明記されている。また、先述の2008年12月の準備委員会による提言書にて論じられた資料センターの位置付けに関し、大学組織として位置付けることも視野に入れて検討を行ったが、現状の補助金制度並びに他大学の受給実績等に鑑みた結果、学院組織への位置付けが適当である旨の提案も含まれている。加えて、期待される組織・構成員として、事務職員の枠組みではあるものの、アーキビストという新たな職務が明記されたことも付言しておきたい。



工事中の常設展示室兼ラウンジ

さらにこの答申を踏まえ、資料センターの開設に向けて、答申内容の具体化、規程の整備、百年館に設置予定の展示室企画などの具体的な検討を行うために2014年6月に武井副学長を委員長とする資料センター設置準備委員会が設置された。同委員会では、展示設計競技を含む展示計画に係る協議、並びに資料センターの関連規程について協議を進めた。特に展示設計競技に際しては、百年館の趣旨を踏まえた展示コンセプトであるか、そのコンセプトを踏まえたゾーニングになっているか、学院の校風や雰囲気踏まえた意匠性であるか、来館者（学生等、同窓生・地域の方々、教職員）への工夫や配慮が見られるか、などの観点から設計会社を選定した。選定後は、同設

計会社と展示計画の具体的策定を加速化させるべく設置準備委員会の下部組織として展示小委員会を設置のうえ、展示コンセプトや展示資料に至る詳細の立案を進めた。十数回に及ぶ展示小委員会による協議を経て、ようやく百年館1階エントランスホールに併設される常設展示、並びにエントランスホール北側に設置する企画展示室の展示計画が確定した。

常設展示においては、まずシンボル展示が来館者をお迎えするが、このシンボル展示を中心としてシンメトリーに展示ケースや展示パネルが展開されている。柱面にはモニュメントウォールと対をなす大時計、壁面には西南学院年表とドージャーパネルがこれも対をなして掲示されている。また、常設展示の核をなす展示ケースについては、「学院創立」「学校生活」「キリスト教教育」「特色ある教育」と4つの視点に分けて関連する資料を展示している。

さらに奥の企画展示室に足を進めると、西南学院の100年の歩みを写真や地図で紹介する「クロニクル映像」が投影されている。映像をご覧いただいた後は、C.K. ドージャー、M.B. ドージャー、E.B. ドージャーのそれぞれが残した言葉を手掛かりに、いかにしてキリストに従い、建学の精神を体現したかを紹介する資料センター開設記念企画展「3人のドージャーからのメッセージ」が2017年1月20日までの間、来館者をお迎えした。



開設記念企画展「3人のドージャーからのメッセージ」(2017年1月)

#### 4. 今後の歩み

以上、2016年10月22日に無事開設を迎えた百年館および資料センターについて概要紹介を進めた。開館後、学部主催の講演会やシンポジウム、同窓会による会合、懇親会などの様々な催事が行われ、学生や教職員のみならず、同窓生や地域の方々が多数来館され、展示資料にも触れていただいている。

学院創立100周年を機に、次の100年に向けて新たな歴史を刻み始めたわけであるが、この新たな建物、そして資料センターがその設置目的を踏まえ、真に期待される役割を果たすべく、我々構成員は先達が記した貴重な論点を捉え、発展に尽力しなくてはならない。百年館にあっては、教育・研究活動に資する場、そして、学生・生徒等が、同窓生や地域の方々など様々な立場や世代の方々との自由で活発な交わりを通じて人間力を高める、そのような場になることを期待したい。一方、資料センターにあっては、同センター規程にも謳われているとおり、国内外の継続的な資料の収集、整理・保存、資料の調査・研究と成果発表、資料の公開およびレファレンス、学院史教育に関する業務、今般開催している展示企画など多岐に亘る役割が期待されている。これらを現実のものにするためには、収集資料等の調査と研究を行うテーマ別研究会の発足、資料公開に向けた資料のデジタル化推進、あるべき自校史教育の在り方に係る関係各所を交えた検討など、様々な事案に着手しなくてはならない。これらの事案を進展させるには、組織体制の強化も要求されよう。しかしながら、目下の学院における様々な内外環境を勘案すると、即座に充実に向けた措置が講じられるということは難しいと言えよう。

西南学院の歩みとともに新たな歴史資料が生まれる。資料センターの営みは、時間も資源も要しながら連綿と続く活動である。建学の精神を継承する拠点となることを標榜し、次の100年に向けて、学院の歴史と伝統をしっかりと紡ぐ役割を担うために、我々構成員が成し得ることは、与えられた環境と資源下で、内外のニーズを踏まえながら優先順位を設け、着実に活動を継続することではないかと考える。